227
2023.11.15

学会ニュース

The Academic Society of Tokyo Woman's Christian University

〈学生研究奨励費成果報告〉

オンライン学習支援で得られる学び　子どもたちと学生の成長に着目して …… 2
本学図書館所蔵『源氏百人一首』の翻刻と字母研究 …… 3
「屋外空間のさらなる活用に向けた社会実験」報告 …… 4
地域における持続的な日本語活動 …… 5
～ VEC 日本語活動を例に～
地域日本語活動における支え合い …… 7
～参加者の「自発的発話」に注目して～
日英児童文学研究 …… 8
── 食をめぐる物語 ──
対等的で双方向な学びを支える意識形成 …… 10
── オンライン学習支援活動を通して

22ⅠA1

オンライン学習支援で得られる学び 子どもたちと学生の成長に着目して

1．はじめに

本研究のメンバーは、日本の小中学校に通うムスリム家庭の子どもたちに対してオンラインで教科学習支援を行っている。現在、6家庭11名の子どもたちとともに各家庭週に1回～3回程活動を行っている。活動のメンバーは20名ほどで、本学の日本語教員養成課程を履修する学部生や日本語教育を学ぶ大学院生が中心である。この活動では、主に学校の宿題を行ったり、子どもの苦手科目の学習に取り組んだりしている。わたしたちは、この活動を便宜的に「オンライン学習支援」と呼んでいるが、実際は、「一方的に支援する」だけではなく、学生も子どもたちもお互いに「学び合う」活動として対等な目線で向き合うことを大切にしている。

本研究では、「『子どもたちの変化・成長』そして『学生の学び』を明らかにすること」を目的とする。本研究によって、今後のオンライン学習支援の継続、更なる発展に繋げることができると考える。

2．活動の意義と研究方法

この活動を行う意義として、悩みや問題を抱える外国につながる子どもたちがのびのびと生きられる環境整備の必要があると考えている。研究は、悩みを抱える子どもたちと接する中でわたしたち学生が学んだことを記した「東女生の学びの記録」、子どもたちの様子や学習でつまずいた部分などをまとめている「学習の記録」の二つの記録を基に進めた。「東女生の学びの記録」からは「子どもたちをサポートする上での学び」と「子どもたちとの時間を過ごすなかでの学び」、そして「学習の記録」からは「子どもたちの成長」の視点で分析、考察をした。

3．分析と考察

分析、考察の結果、「子どもたちの変化・成長」について2点、「学生の学び」について3点、明らかになった。

3.1.「子どもたちの変化・成長」

1点目は、苦手な分野への向き合い方である。これまでは、子どもの得意な分野に偏ってしまうことが多くあったが、苦手な分野こそ一緒に学習する意味があることを伝え、時間をかけて向き合うことで、「できる」という経験が増え、苦手意識が減った。

2点目は、学習意欲の向上である。テストで良い点数を取ったときや学校で褒められたときなど、うれしい経験が増えることで、学習意欲の向上を感じた。学習中は小さなことでも褒め、「できた」という経験を積み重ねていくことで、子どもたちの学習意欲や集中力が向上したと実感している。

3.2.「学生の学び」

1点目は、学習の進め方である。学習の開始当初は、学生が進めていくことを意識して学習していたが、回数を重ねる中で、子どもたちの反応や質問から学習の進め方について学ぶことが多くなり、子どもたちと一緒に学習時間をつくっていくものだと感じた。例えば、多少時間がかかっても、子どもたちが自らの力で考えられるように「待つ」時間を大切にしている。この「待つ姿勢」は、日本語教員養成課程の授業での学びが活動に活かされた事例である。

2点目は、信頼関係の構築である。毎年、学生の編成替えや新しいご家庭の追加により、子どもたちと学生の信頼関係の構築が重要になる。学生それぞれが子どもたちと過ごす時間を大切にすることで信頼関係の構築に繋がっていると考える。

3点目は、活動への積極的な関わりである。この活動は、2020年6月に始まり、約2年半が経った。家庭や子どもたちの数が増え、学生ひとりひとりの活動期間も長くなった。この活動に対してより積極的になり、活動への参加頻度が増えた学生や、担当家庭が増えた学生もいる。ひとりひとりが自分にできることを考え積極的に活動に関わることは、この活動の継続にも繋がる。次年度も継続して活動ができるよう、積極的な関わりを続けていきたい。

4．おわりに

本研究を通して、オンライン学習支援活動における子どもたちの変化・成長と、学生の学びについて明らかになった。子どもたちの成長を再確認でき、学生にとって、この活動が「大学での学びを活動に還元できる機会」となっていることを認識し、子どもたちとの信頼関係を構築することの大切さを感じた。

今後の課題は、この活動を次世代へと繋いでいくことである。活動をつなげていくためにも、本研究で得た結果をほかのメンバーにも共有し、後輩にも伝えたい。そして、子どもたちとの時間を大切にし、これからも試行錯誤しながら丁寧に活動を続けていきたい。

（文責者：爲国）

（代表：澁谷こはる／五嶋友香　岡田菜央
爲国結莉恵　唐﨑千香子／
助言者：松尾慎先生）

22ⅠA2 本学図書館所蔵『源氏百人一首』の翻刻と字母研究

はじめに

古典文学研究会は、2019年度から「近世期において『源氏物語』がどのように享受されていたのか」、「『源氏物語』の和歌がどのように解釈されていたのか」、「版本においてどのような文字が使用されていたのか」の3点を解明するため、本学図書館所蔵の『源氏百人一首』の研究をしてきました。

『源氏百人一首』は、天保10（1839）年刊行の、黒沢翁満による『源氏物語』で詠まれる和歌の解説書です。黒沢翁満は江戸後期の国学者で本居宣長を師とした人物です。本作は『源氏物語』作中で詠まれる和歌を登場人物一人につき1首ずつ選出するというまさに『百人一首』のような形がとられています。版本には半丁に和歌が一首取り上げられ、上段に詠んだ人物と和歌の解説文、下段に人物名と和歌、挿絵（人物の絵）が記されています。また本作は「百人一首」という言葉が題にありますが、実際には123人の人物が選出されており、不可思議な点の残る作品であるといえます。さらに、選出された人物には光源氏や頭中将のような主要なものから山吹女房や井手女房などの端役も見られ、著者の人物・和歌選出のこだわりや豊富な『源氏物語』の知識が窺えます。

今年度の活動状況

今年度も昨年度から引き続き、本作品の翻刻、字母研究を進めてきました。前期は新たに入会したメンバーにくずし字の解読に慣れてもらうことを中心に、後期は字母や解説文の吟味、検討を重点的に行いました。その結果、39ウラの平内侍から51ウラの近江君までの計25首の翻刻、研究を行うことができました。また、8月末には近江神宮、石山寺への研修旅行も行いました。近江神宮は『小倉百人一首』に最初に収録されている和歌の作者である天智天皇を祀っており、「百人一首の聖地」とされる場所です。和歌や『百人一首』は『源氏物語』と同じく古くから親しまれ今日まで守られてきた文化、作品であることが分かり、『源氏百人一首』もその中で影響を受け書かれたものであると考えさせられました。石山寺には紫式部が『源氏物語』を執筆したといわれる一室「源氏の間」があり、紫式部はここから湖面に映る月を見て『源氏物語』の須磨巻の一場面の着想を得たとされています。この部屋は高貴な身分の人が使用していた場所であったらしく、一女房であった紫式部がそこに参籠したことから窺える『源氏物語』の執筆への大きな期待を知ることができました。

翻刻・研究結果

今年度の研究の結果、著者は同じ言葉に対し複数の表記を用いていることが分かりました。例えば、44ウラ螢兵部卿宮の解説文では『源氏物語』の登場人物である玉鬘（たまかずら）のことを「玉葛」と表記していますが46オモテ大夫監の解説文では「玉かづら」とあります。また同じ44ウラの解説文では「他より消すにきゆる物か消る物にはあらず」とあり、同じ「消す」という漢字をあてることができる言葉でも「消す」、「きゆる」、「消る」と表記を使い分けていることが分かります。48オモテ明石中宮でも上段2行目に「みをつくしの巻」、3行目に「薄雲のまき」、4行目に「藤のうら葉の巻」とあり、「巻」と「まき」を使い分けています。少なくとも著者は隣接する部分には連続して同じ漢字を用いず、仮名表記を挟むようにしていたのではないでしょうか。

次に47オモテ玉葛内侍督の和歌中にある「で」という字についてです。本作品では濁音には濁点の表記がされていますがここではそれがなく「傳」を字母として「て」と表記されていました。『源氏物語』の該当場面においてもこれが「で」と読まれるのは間違いないため、「傳」を字母とした場合濁点がなくても一文字で「で」と読むことができる可能性があるといえます。

また、昨年同様解説文の言い回しにも特徴がありました。45オモテ兵部姉御許の上段には「下の兵部の君の姉也」、45ウラの兵部君では「此うたも上と同じ時に詠る」とあり、次の半丁について言及するときはそれを「下」と称し、一つ前のものは「上」と指していることが分かります。

さらに、多くの解説文は人物の説明や和歌の意味が記されていますが47ウラ右近では和歌に古今集の引歌がある、42ウラ右大辨では歌中の「よは」は「宵」のことで「夜半」ではないと和歌の技法や文法についての言及があるなど、著者の国学者ならではの視点が見られました。

おわりに

今年度も『源氏百人一首』の研究を通して、本作品における文字の使い方や執筆内容の特徴など興味深い点を多く見つけることができました。来年度へ向けての課題としては、一つに昨年度にも指摘があったものの言及できなかった和歌の選出基準や人物配置の調査が挙げられます。もう一つは発表会でご指摘いただいたこの研究の最終的なゴールは具体的にどこにあるのかということを明確にすることです。この2点、特に2点目について考えながら今後も活動を続けていきたいです。

（文責：進）

（代表者：進実来／飯田希栄　中島玉貴　奥村藍
窪川葵　都築ひかり　工藤京子／
助言者：今井久代先生　光延真哉先生）

22ⅠA3「屋外空間のさらなる活用に向けた社会実験」報告

1．本研究の目的

本研究は東京女子大の未利用の屋外空間を学生のための豊かな交流の場として利用促進し、本学をより魅力的なキャンパスにすることを目的として社会実験を行った。

2．先行研究

はじめに、私たちが目指すべき魅力的なキャンパスとは何なのかを明らかにする。アメリカの都市を論じたジャーナリストのジェインジェイコブズは、著作の中でこう述べている。「ある都市を思うとき、最初に心に浮かぶものは街路である。街路が面白ければ、都市も面白く街路が退屈であれば、都市も退屈である。」[1]。

このジェイコブズの論から、公共空間、屋外空間での人のアクティビティの重要性がヤンゲール[2]らによって説かれてきた。キャンパスになぞらえるならば、キャンパス屋外空間こそが大学を表している。また、そこに表出するアクティビティこそが大学の魅力を作るといえる。つまり、私たちが目指すべき魅力的なキャンパスには、多様なアクティビティがあることが重要であると考えた。

さらに、プレイスメイキングの研究者の園田は、豊かな空間についてこう述べる。「空間としてのスペース（SPACE）ではなく、人々の居場所としてのプレイス（PLACE）作ることが豊かなまちをつくる上での課題である。」[3]。

ここでのスペースとプレイスの違いは「センス・オブ・プレイス」の有無である。「センス・オブ・プレイス」は、場所性、場所らしさ、その場所への人々の情緒的な思いのことを指す。つまり、豊かなキャンパスを作るためには、スペースをプレイスにしていくことが問題である。従って、キャンパスをより豊かな交流の場とするためには、学生がキャンパスを楽しみ、思い入れを育てていくことが効果的であると考えた。

3．先行調査

3-1　観察調査

（写真１　croSS 広場　４月中旬 12 時 45 分撮影）

社会実験の実施に先立ち、学内の屋外空間の利用状況把握のために観察調査を行った。写真１のように、croSS 広場のベンチ部分には学生が滞留し、食事を取る、コミュニケーションを取るなどの様子がうかがえる。その一方で、写真１右側の芝生部分には学生が滞留する様子は見られない。他にも、７号館裏庭や女性学研究所前などもほとんど学生が立ち入ることのない空間が存在する。

3-2　アンケート調査

3-1 の観察調査に合わせて、学生の利用状況についての Google Form を用いたアンケート調査を行った。

このアンケート調査では、授業のない時間に過ごす場所として回答されたのは図書館が最も多く 43.9% であった。その次に多かった回答は 11 号館大ホールであった。屋外空間（croSS 広場のベンチまたは芝生）と回答したのは約 4% のみだった。

以上の調査結果を踏まえると、交流の場としてのポテンシャルをもつ芝生空間が十分に活用されていないことが分かった。

4．手法の選定

現在、全国各地で遊休スペースを利用し、地域に新たな交流の場を作り出す取り組みが行われている。その中でも今回、ピクニックを用いた手法に着目した。東京ピクニッククラブ[4]は、「社交の場」としてのピクニックの役割を求め、その場所の歴史に目を向ける活動をしている。また、公共空間において、自分の居場所を作り出していくことでその場所への思い入れをはぐくみ、シビックプライドを醸成することも狙いとしている。そこで、本学学生に交流の場として屋外空間を利用してもらうための手法としてピクニックを選定した。

学生のピクニックの動機づけのために、「誰もがピクニックしたくなるピクニックプラン」の作成を行った。グループごとに分かれ、ブレインストーミングを行いコンセプトを設定した。これに基づいたピクニックグッズを収集し、学生向けに貸し出すことを社会実験として行うこととした。

5．社会実験の実施

実施した社会実験の概要は以下のとおりである。

①概要

キャンパス屋外空間の活用を目的として、ピクニックセット貸し出しを行う。

②実施日時

11 月 21 日から 12 月 9 日の 11 時から 14 時 45 分

③実施場所

croSS 広場芝生部分

6．社会実験の結果

社会実験の結果は表１の通りである。

表１　ピクニックセット貸し出しの社会実験の結果

日付	2022/11/21	2022/11/22	2022/11/23	2022/11/24	2022/11/25
曜日	月	火	水	木	金
備考	午後から	中止	休講日		
天気	雨のち晴れ			晴れ	晴れ
最高 / 最低気温	17.8°C / 10.8°C	20.4°C / 10.1°C	15.3°C / 10.3°C	20.9°C / 9.5°C	17.8°C / 10.5°C
ピクニック実施者	1組			2組	8組
	2022/11/28	2022/11/29	2022/11/30	2022/12/1	2022/12/2
	月	火	水	木	金
	曇り	雨	曇り	曇り	晴れ
	14.3°C / 8.4°C	21.3°C / 11.6°C	19.2°C / 15.6°C	13.6°C / 8.4°C	13.3°C / 6.1°C
	1組	0組	2組	1組	2組
	2022/12/5	2022/12/6	2022/12/7	2022/12/8	2022/12/9
	月	火	水	木	金
	午後中止				
	曇り	小雨	晴れ	晴れ	晴れ
	10.3°C / 5.2°C	8.6°C / 4.1°C	14.2°C / 3.6°C	14.9°C / 4.3°C	13.8°C / 5.0°C
	0組	0組	4組	5組	2組

気温の低い季節にもかかわらず、晴れた日には８組ほどの学生がピクニックする姿が見られた。借りた学生の意見では、今後キャンパス屋外空間でやってみたいこととして野外シネマや音楽ライブなど様々なアクティビティが挙げられた。

7．考察

今回、ピクニックを通して様々なアクティビティがキャンパスに生まれる可能性を見ることができた。主体的に屋外空間を使いこなしキャンパスを舞台に交流する学生をいかに表出させるかが今後の課題である。

SNS で活動を発信する中で交流のなかった学生も参画していった。つまり本研究そのものが、学生の交流を生み出したと考える。今後は、地域住民も巻き込んだコミュニティを形成するために東京女子大周辺地域にも活動を広げていきたい。

1　『アメリカ大都市の死と生』ジェインジェイコブズ著，山形浩生訳，2010，鹿島出版会
2　『人間の街』ヤンゲール著，北原理雄訳，2014，鹿島出版会
3　『アクティビティファーストのプレイスメイキング』園田聡著，2019，学芸出版社
4　東京ピクニッククラブ HP　http://www.picnicclub.org/

（文責：伊藤）

（代表者：伊藤花織／力久万葉　大谷彩音　千種紗奈　大鳥葵　広海百海　末武実央理　富高千尋　羅宛婷／助言者：籾山真人先生）

22ⅠA4

地域における持続的な日本語活動
～ VEC 日本語活動を例に～

1．はじめに

現在、日本では在留外国人の数が増加している。日本に暮らす外国籍住民との共生が注目されるなか、外国籍住民と日本社会をつなぐ場のひとつとして「地域日本語活動（教室）」がある。

本研究のメンバーは、東京都の高田馬場で Villa Education Center（以下、VEC）の日本語活動に参加している。VEC では、毎週日曜日の午前 10 時から 12 時にミャンマーや中国出身者とともにさまざまなトピックについて知ったり、議論したりし、学び合う活動を行っている。本学の松尾慎先生をはじめ、大学院生や卒業生がファシリテーターを務め、毎回の活動をデザインしている。この活動の特徴は、「教える人」と「教えられる人」を固定せず、参加するすべての人が学び合うことを大切にしている点にある。なにかひとつの教材を用いるのではなく、自作のワークシートを用いて対話を通した学び合いの活動を実践している。

VEC は 2014 年に活動を開始してからこれまで 407 回（2023 年 10 月 23 日時点）継続して活動を行ってきたが、活動への参加を通して、ひとつの活動を続けていくことが決して容易ではないこと、VEC の参加者をはじめ外国籍住民の学びの場を守り続けることの重要性を感じた。そこで、本研究では、VEC の持続性に注目し、以下の２点を明らかにすることを目的とする。

1）活動をデザインする側の人々がどのような想いをもち、VEC に参加し続けているのか
2）活動参加者が自身の学びで終わらせるのではなく、後輩など周囲の人々へも VEC の学びを広げようとしている理由はなにか

これらを VEC に参加し各メンバーが内省すること、また活動後にまとめている「振り返り」ファイルを分析することを通して考察する。地域における持続可能な活動づくりを明らかにする点に、本研究の意義がある。

2．考察１：どのような想いで VEC に参加し続けているのか

ひとつの理由は、VEC が学び合いの場であると同時に、安心できる場であるからだ。これらは「学習者」が活動に継続的に参加するために重要な要素であり、わたしたちはそのような場をつくるために活動をデザインしていく必要がある。さらに、VEC はミャンマーや中国出身参加者にとってだけでなく、活動をデザインする側にとっても安心できる場となっている。「振り返り」ファイルには、教師の残業問題について扱った回のものに、ファシリテーターから以下のようなコメントがあった。「久しぶりに会いたい人がたくさん来てくれた」、「日頃からこの問題について関心があった。今日みなさんと話し合えてよかった」。これらのコメントから、

VECは人々が顔を合わせて対話をする場の創出にもつながっていることがわかる。また、関心がある問題について「VECで会う人となら対等に話し合うことができるため、学びを深められる」と考えていることが伺える。このような安心感が、「またVECに参加したい」と思わせる原動力となっている。

もうひとつの理由は、毎回の教室で新たな気づきや新たな視点を得られ、その学びから自分自身が豊かになるからだ。VECには、さまざまな背景をもつ人々が集まるため、ひとつのテーマに関する意見やアイデアもさまざまである。例えば、食品ロスをテーマにした活動では、「ミャンマーでは米の研ぎ汁を使って漬物を作る」というようなアイデアがあった。対話を通して意見やアイディアを共有することで、ひとりでは考えつかないようなアイデアを知ることができ、それが学びに繋がっている。

3．考察2：どのような想いでVECの学びを広げようとしているのか

VECで学んだことをひとりでも多くの人に知ってほしい、VECを体験してほしいという想いがあるからだ。わたしたちは大学生になってから同年代との関わりはあっても異なる年代の方々との交流はほとんどなかった。しかしVECに参加し始めたことで、自分自身が知識に富んでいる内容でもそうでないものでも、恥じらいなく異なる年代の人と対話する機会がある。このような自身の体験を通して、「地域に出て多様な背景の人々と対話することの大切さを伝えたい」、「生涯学習の場ともいえるVECの場を守りたい」という想いが生まれ、これまでVECの認知・啓発活動を行ってきた。例えば、本大学の「日本語教育」「多文化共生」関係の授業での発表やワークショップの開催、教員向けセミナーや多文化社会専門職機構のフォーラムなどがある。認知・啓発活動を通して、聞き手のみなさんの客観的な視点から意見をもらうことでわたしたちの刺激にもなっている。

4．おわりに

VECが持続的に活動をしてきた背景には、VECが対話を通してつながる学びの場であり、参加するすべての人にとって「安心できる居場所」であることが挙げられる。さらに、そのような場をより多くの人に共有したいという想いから、参加者が主体的に認知・啓発活動を行っていることがわかった。

外国籍住民のみならず、多様な背景の人々とともに暮らしていくためには、誰ひとり取り残さない「つながる場」を提供すること、「安心できる居場所」を地域において展開していくことが重要であると考える。そのための仕掛けづくりとして、VECのような地域の日本語活動（教室）が機能していくことが望まれる。

（文責：東樹）

（代表者：東樹美和／北中伶奈　西村愛　矢部紬／
助言者：松尾慎）

22ⅡA1

地域日本語活動における支え合い
～参加者の「自発的発話」に注目して～

1．はじめに

昨今、日本に暮らす外国人住民との共生が叫ばれる中、外国人住民と日本社会をつなぐ存在として注目されているのが「地域日本語教室活動」である。

本研究のメンバーは、東京都新宿区高田馬場において任意団体「Villa Education Center」が実施する日本語活動（以下、VEC）に参加している。毎週日曜日の午前「やさしい日本語」で書かれたニュースについて、ミャンマーや中国、インドネシア出身の参加者と対話を通して学び合う活動を行っている。本学の松尾慎先生をはじめ、大学院生や卒業生がファシリテーターを務め、毎回の活動をデザインしている。この活動では「教える人」と「教えられる人」を固定せず、参加するすべての人が学び合うことを大切にしている。

VECへの継続的な参加を通して、長年の参加者が、初参加するあるいは活動歴が浅い参加者に活動の仕組みを伝えたり、母語で訳したりする場面を目にすることが増えた。そこで本研究では、参加者の「自発的発話」に注目した。ここでの「自発的発話」とは発話をするように個人的に直接求められたり強制されたりしていないときに、参加者が主体的に発言したり質問したりすることを指す。

本研究では1）ミャンマー参加者の「自発的発話」、2）参加学生の「自発的発話」に分け考察する。これらをVECに参加し各メンバーが分析し、考察する。それにより、地域日本語活動における母語の役割、「自発的発話」の分類を明らかにする点に本研究の意義がある。本研究で明らかになったことを今後のVECの活動や地域日本語活動の場でどのように活かしていけるのか考察していきたい。

2．ミャンマー参加者の「自発的発話」（発話の指示）

日本人同士の会話やこれまでのファシリテータの話の内容が分かりにくい様子であるとき、母語や日本語で確認する。母語を使用することで言いたいことを伝えるためのコミュニカティブアプローチを実現している。さらに分からないことがあったら母語で頼っていい、それよりも自主的に話すことがいいのだと参加初期の参加者が知ることができる。また母語を同じくする参加者がいち早く彼の言いたい内容を察し、日本語で代弁することで参加が初参加者も発言が伝わったという自信と安心感につながる。

3．ミャンマー参加者の「自発的発話」（活動の指示）

日本語に慣れていないミャンマー―参加者が次にする活動が分からず困惑している時、他のミャンマー―参加者が母語で何をすればいいのか母語で説明をすることによって参加者全員が活動に参加できる状態になった。

グループ活動後の発表を行う際、活動の参加に慣れているミャンマー―参加者が初参加であった日本人参加者に発言を促した。活動において日本人参加者とミャンマー参加者が対等な関係であることを周囲の参加者も意識する機会の創出に繋がる。

4．参加学生の「自発的発話」（発話の指示）

初参加者がいた際、ある参加学生が活動の流れや発話量を見て発話が少ない初参加者に「○○さんはどう思いますか」といった指示をし、発話を促していた。それにより、参加者に偏りなく発話機会が設けられ、また発話を促す側もタイミングやどの話題なら話しやすいかなどを判断し発話を促すことが重要であることが分かった。

5．参加学生の「自発的発話」（活動の指示）

グループでの活動を始めるとき、ファシリテーターの指示の言い直しがある。これにより、全体の活動からグループ活動への切り替えがスムーズになる。また参加学生はミャンマー参加者の表情、態度から分かっているかどうかを感じ取り、それに応じて指示の仕方を工夫しているので話しやすい場を作っている。

6．分類できない「自発的発話・行動」

一つ目は、意味伝達だ。活動の中でミャンマー参加者に意味のわからない言葉が出たとき、意味をやさしい日本語やイラスト、画像、ジェスチャーで伝えるという場面があった。例示による意味理解促進が促されている。

二つ目は、発話の指示でもあり、活動の指示でもある時だ。グループ活動後の全体共有の際に、学生参加者が発表のヒントを与えることでミャンマー参加者はなにを話せばよいかを理解することができ、その後積極的に発話するようになった。

三つ目は、外での活動の際の声掛けや活動前後の準備・片付けだ。参加者同士で必要なことを確認する場面が見られた。参加者同士での日常的な会話の理解促進につながる。

四つ目は、相槌、拍手だ。誰かが発表している時、多くの参加者が相槌を打ったり、発表が終わったら拍手をしたりする。周りに行動や言葉で自分の理解度を伝える働きがある。

7．考察・今後の課題

ミャンマー参加者の自発的発言は、発言の自由の担保につながっている。また参加学生の自発的発話は活発な発言を促進するものである。それにより、皆が対等で安心感のある教室となっている。

今後の課題として、今回分類できなかったものをどう枠組みするかだ。また参加人数が増加に伴い自発的発話

の手助けがより重要になるので率先して促進することが求められている。

今後も多様な人々がVECで安心して参加、発言しやすい場となるよう意識して活動を継続していきたい。

（文責：北中）

（代表：北中伶奈／秋吉里保　坂崎茉生　千葉幸海　中野真帆　松本夏実　西村愛　矢部紬／
助言者：松尾慎先生）

22ⅡA2

日英児童文学研究
―食をめぐる物語―

はじめに

私たちは、翻訳基礎論・英語文学（児童文学）などの授業を通して、多くの児童文学作品に触れてきた。その中で、作品に登場する食べものにも意味があり、作者の意図が含まれていることに気づいた。食は文化によって異なり、日常を映し出すものであり、何より私たちと切り離せないものである。しかし、文学を学ぶ機会は多くあるものの、文学の背景にある食文化や物語と食べものの関係について学ぶ機会はほとんどない。そこで、「食」という新たな切り口から児童文学を捉えたいと考え、この研究、冊子の作成に至った。

先行研究として、参考にしたのは、以下の書籍などである。川端有子・西村醇子『子どもの本と〈食〉：物語の新しい食べ方』、赤木かん子『子どもの本とごちそうの話』、北野佐久子『物語のティータイム　お菓子と暮らしとイギリス児童文学』、ダイナ・フリード『ひと皿の小説案内　主人公たちが食べた50の食事』、鷹野久『午後3時雨宮教授のティータイム　お菓子と暮らしとイギリス児童文学』、三谷康之『イギリス紅茶事典：文学にみる食文化』。この研究を行うことにより、文学を学ぶ私たち学生が児童文学への理解を深めること、日常的に本に触れない他の学生に文学の面白さを広めることが本研究の目的である。

研究の流れ

週1回定例ミーティングを開き、内容の検討や作業を進めた。作品の選定、記事の構成、編集、レイアウト構成まで全て自分たちで作成した。スケジュールとしては、12月で作品検討、おおまかな流れの決定、1～3月で読み合わせと校正をメンバー同士で繰り返し、4～5月で編集作業、6月でレイアウト構成、助言者の先生による校閲、イラスト挿入や表紙デザイン→印刷原稿完成→印刷所へ入稿といった流れで進めた。

冊子『ものがたりの隠し味』について

全50ページからなる『ものがたりの隠し味』を刊行した。特徴の異なる作品からイギリス5作、アメリカ1作、日本3作の計9作品を取り上げ、それぞれに作品紹介、原文や訳文からの抜粋引用、解説、作家紹介を入れた。「あらすじ」や「解説」は、作品や様々な参考資料を読んで自分たちで書き上げた。作品紹介には、その作品における食べものの役割をまとめた「Food in This Work」というキャッチフレーズをつけて、ひと目で伝わる工夫もした。9作品は文字から食べものを想像できる児童書と小説にしぼり、最後に冊子を作るにあたり、この研究に対する思いや発見、考えたことなどを「はじめに」「編集後記」「おわりに」にまとめた。

図1　『ものがたりの隠し味』表紙

もくじ

はじめに　2
1. アップルバウム先生にベゴニアの花を *A Begonia for Miss Applebaum*　4
2. くまのパディントン *A Bear Called Paddington*　8
3. クリスマス・キャロル *A Christmas Carol*　12
4. ちいさいモモちゃん　16
5. 時の旅人 *A Traveller in Time*　20
6. ナルニア国ものがたり　ライオンと魔女 *The Lion, the Witch and the Wardrobe*　24
7. 西の魔女が死んだ　28
8. 秘密の花園 *The Secret Garden*　32
9. 魔女の宅急便　36
編集後記　40
おわりに　46
研究メンバー　47
物語の料理人たちと児童文学作品を味わってみて　48
引用文献リスト　50

3

図2　『ものがたりの隠し味』もくじ

〈実際のページ〉
1. アップルバウム先生にベゴニアの花を
2. くまのパディントン
3. クリスマス・キャロル
4. ちいさいモモちゃん
5. 時の旅人
6. ナルニア国ものがたり　ライオンと魔女

7. 西の魔女が死んだ
8. 秘密の花園
9. 魔女の宅急便

ドーナツは幾何学上の不思議

Paul Zindel, *A Begonia for Miss Applebaum* (1989)
『アップルバウム先生にベゴニアの花を』ポール・ジンデル作　田中美保子訳

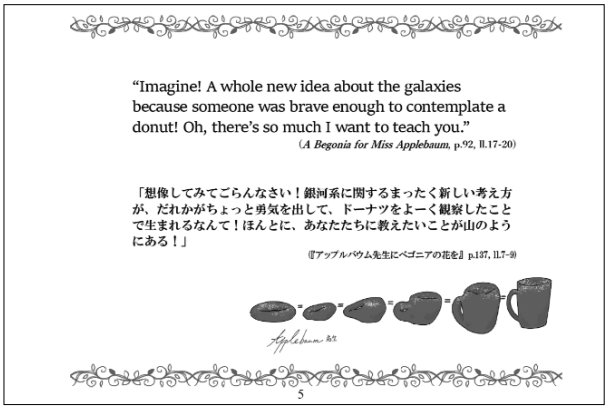
あらすじ

夏休み明け、NYの中等学校で学ぶヘンリーとゼルダは個性的な生物教師、アップルバウム先生が突然退職したことを知る。大好きな先生に会いに行ったふたりは、先生の死期が近いことを知ってしまうが、当の本人にはその真実が伝えられていなかった。先生がどうしても連れていきたいという美術館に行く日、ふたりは先生自身に真実を伝えてあげようと決心する。当日、セントラルパークに先生が持ってきたものとは……。

Food in This Work　先生から教え子たちへのメッセージ

4

図３ 「アップルバウム先生にベゴニアの花を」作品紹介ページ


"Imagine! A whole new idea about the galaxies because someone was brave enough to contemplate a donut! Oh, there's so much I want to teach you."
(*A Begonia for Miss Applebaum*, p.92, ll.17-20)

「想像してみてごらんなさい！銀河系に関するまったく新しい考え方が、だれかがちょっと勇気を出して、ドーナツをよーく観察したことで生まれるなんて！ほんとに、あなたたちに教えたいことが山のようにある！」
(『アップルバウム先生にベゴニアの花を』p.137, ll.7-9)

5

図４ 「アップルバウム先生にベゴニアの花を」引用箇所

編集後記

「児童文学って思った以上に奥が深いんだ！」これが、私がこの研究を通して気がついたことです。子どもの頃に読んでいたときに、何も考えずに楽しんでいた作品。それが、今になってもう一度読むと「こんな工夫がされていたんだ！」「この食べものは、こんな意味を持っていたんだ！」とまた新しい発見がありました。

私が特に印象に残った作品は『西の魔女が死んだ』です。作中では、おばあちゃんが相手に合わせて野イチゴのジャムを様々なガラス瓶に詰めています。一つ一つ瓶に詰めていくのは、時間と手間がかかります。しかし、時間をかけることでその分相手の魅力に気づくことができるのです。私も、おばあちゃんのように相手のことを良く知って魅力をたくさん発見できる人でありたいと思います。最後に、この研究を通して得た素敵な出会いに感謝の気持ちでいっぱいです！

国際関係専攻４年 佐古ひとみ

食べものと児童文学の研究に携わることができて、本当に良かったです。昔、よく読んでいた思い出の

40

図５　編集後記

成果と発見

研究を行い以下の成果と発見があった。成果としては冊子完成そのものがある。また、冊子づくりを通して２点の発見があった。１点目は「イギリスに比べ、日本の児童文学には食べ物が登場しない」ということである。イギリスの児童書では様々な食べものが登場する一方、日本では食べものが登場する絵本は多いものの児童書となると数が少なく、対象作品を選ぶのに苦労した。当初、児童文学であれば、国を問わずに多くの食べものが登場するだろうと考えていたため、研究を行う中でこのことに気づいた。理由としては、日本では古くから様々な国の食文化が根付いており、食生活が多様化しているために、日常の食の代表となるものがないからなのではないかと考える。そのために、日本の作家には物語中で食に着目するという発想が生まれにくいという結論に至った。２点目は、それぞれの作品で、「食べ物は『隠し味』的なエッセンスとして用いられている」ということである。食べものは、作品の文化的背景に深く関わっており、作品自体の世界観と実際に書かれた時代や文化が表れる。また、登場者の気持ちや登場者同士の関わりなどといった作者の意図が食べ物に託されていると思える作品もあった。「おわりに」にて「児童文学も、食べものも、時をかけるひとつの装置です。」とメンバーのひとりが述べているように、正に児童文学と食べ物には時間を超える感情を与えられるという共通点があると考えられる。

おわりに

今回の研究では、当初は登場する食べものを実際に作るまで取り組みたいと考えていたが、スケジュール上それができなかったため、いつかメンバーで実際に作ってみたいと思う。また、この本を渡した人から感想を聞くことで、他の作品において印象的な食べものやその役割について考えてみたい。

学年も専攻も異なるメンバーで約８か月間集まり、デザインやイラスト、製本まで自分たちで完成させることができ、物語の料理人としてメニュー開発をしているような充実感と楽しさを味わうことができた。

（文責：小林）

（代表：小林千紘／安澤成美　石村美乃莉　伊藤櫻子　金本さゆり　佐古ひとみ　牧野めぐ　森澤みちる／助言者：田中美保子）

22ⅡA3

対等的で双方向な学びを支える意識形成
―オンライン学習支援活動を通して

1．はじめに

本研究のメンバーは、日本の小中学校に通うムスリム家庭の子どもたちにオンラインで教科学習支援を行っている。現在、本学の日本語教員養成課程の履修学生および修了生メンバー約14名が、6家庭11名の子どもたちと各家庭週1～3回活動している。本活動は2020年に始まり、これまで関わった学生メンバーは累計29名となった。

活動を継続するなかで、「この活動は学生と子どもたち双方にとっての学び合いの場である」という理念が活動開始当初から変わることなく受け継がれていると考えている。

2．活動の意義と研究方法

本研究の目的は「この活動は学生と子どもたち双方にとっての学び合いの場である」という理念に着目し、以下3点を明らかにすることである。

①この理念が学生メンバー全員に脈々と受け継がれている理由

②学生メンバー個々人のどのような学びがこの意識を形成しているのか

③オンライン学習支援の活動をどのように受け止めているのか

研究方法は、活動後に記入する「学習の記録」、そして研究メンバー自身が活動への関わりや変化を内省し、メンバー間で共有した内容の分析・考察である。本研究が今後の活動の継続に寄与し、さらなる活動の発展が期待できるという点に意義がある。

3．分析と考察

3.1.「この理念が学生メンバー全員に脈々と受け継がれている理由」

本学の日本語教員養成課程の必修授業では「学び合い」の側面が多く取り上げられており、活動メンバーが「学び合い」の意識をもっていたのは確かだが、実際に活動に参加すると「宿題を終わらせなければ」という思うこともあった。

交流の中で子どもたちが話したいと思っていることに向き合い、受け止める存在が大切だと感じ、他愛のないおしゃべりの時間を大切にするようになったことで、信頼関係そして学び合いの意識が構築されたと考えられる。

また大学の授業などで活動紹介を聞き、そこで活動内容や理念を知って現在活動に参加するようになった学生もいる。このように、信頼関係や活動の雰囲気がこの理念を繋げていると推測でき、子どもたちの存在が架け橋のような役割を果たしてくれていると考えられる。

3.2.「双方にとっての学び合いの場である」という意識形成について

学生メンバーそれぞれがどのような場面で「学び合っている」と感じるかについて分析を行ったところ、二つの共通点が挙げられた。

1点目は「文化・価値観の違いを感じた時」である。活動を通して、海外ルーツの子どもたちの考え方や抱える悩み事に触れ、お互いの文化や価値観の違いを理解し合えた時に「学び合っている」と感じる学生が多いことが分かった。活動を通して新たな気づきや視点を得ることが「学び合い」の意識を形成する要素の一つになったと言える。

2点目は「子どもたちとの関係性の変化を感じた時」である。子どもたちと信頼関係を築き、お互いの気持ちを共有し合うことで、対等な関係で「学び合えている」と感じる環境が作られたと考えられる。対等な関係になれるからこそ、学生メンバーの「教えている」という認識ではなく、「ともに学び合っている」という理念が定着したのではないかと考察する。

3.3.「学生がオンライン学習支援の活動をどのように受け止めているのか」

分析の結果、学生は以下の三つの観点からこの活動を受け止めていることが分かった。

1点目は、子どもたちと学生との「人と人のつながり」についてである。初めは緊張で子どもたちと打ち解けられなかったが、名前を呼び合える関係になれたことで、子どもたちが自分自身を前向きに捉えられるようになり、学習姿勢が積極的になった。

2点目は、子どもたちの母文化についてである。本活動は、子どもたちのルーツに関する文化や、ムスリムの人々がどのように生活しているか、コーランの教えの由来、どのような想いで戒律を守っているかなどを知る機会となっている。

3点目は、この活動を通じた活動メンバーの学びについてである。この活動を通して、「教育」や「学習」に対するイメージを変えることができた。「学び合い」を大切にするこの活動において、バックグラウンドや文化の違いを超えて人と人との関わりを以前よりも実感することができている。

4．おわりに

本研究を通して、①「学び合い」の理念は代々関わってきたメンバーが試行錯誤の結果生まれたものであり、脈々と受け継がれていること、②「学び合い」の意識は現在進行形で変化していること、③この活動をメンバーそれぞれがさまざまな側面から受け止めていることが明らかになった。

今後は、この研究結果をさらに次の世代につなげていくにはどうしたらいいかを考えていくことが課題となる。そして、この活動で得られた学びを他の実践の場でどのように活かすことができるかを考え、この活動だけに留まらない新たな学びを創出することにつなげていきたい。

（文責者：澁谷）

（代表：東樹美和／澁谷こはる　唐﨑千香子　竹川奈々
種本栞／
助言者：松尾慎先生）

編集・発行　東京女子大学学会